

# 震災を知らない世代

河村 香苗(元仙台市水道局職員)

あの時、私は北海道大学の4年生でした。卒業間近の時期、札幌の研究室で最後の実験を行っている最中に地震が起きました。当初、大した揺れとは思わなかった私はそのまま実験を続けましたが、宮城県で震度7という速報を見た先輩が実家は大丈夫かと顔色を変えて心配してくれ、実験の手を止めました。(仙台の丘陵部にある私の実家は幸いにもほとんど被害がなく、家族も無事でした。)あの時どんなことがあったか、どんなことを感じたかという記憶は強烈なもので、10年経った今でも鮮明に思い出すことができます。

発災から3週間後の4月1日に仙台市役所に採用され、晴れて社会人となりました。「晴れて」といって、辞令を手渡し訓示を行う市長は防災服姿、新人向けの研修は無く、新規採用職員はすぐに仮の配属先(大半が沿岸部の避難所)に連れていかれ、ゆっくりと社会人になった喜びを噛み締める時間ありませんでした。私は6人の同期とともに水道局へ配属されました。

水道局は第一希望の配属先で、この非常時に自分も何か役に立ちたいと思っていましたから、私は「よし、やるぞ!」とやる気に満ち溢れていました。ところが、市内の水道がほぼ復旧した後であった時期とはいえ、ライフラインの最前線である水道局で、大学を出立での新人ができることなんてたかが知れていました。採用初日から上司にくっついて災害対策本部に出入りしたり話を聞いたりしていましたが、まず話の内容がわかりません。当然、何をしたいのかもわからず、私はただそこに居るだけで、本当に無力だったと思います。先輩や上司からは「この場にいること、様子をよく見て覚えておくことが大事な仕事だよ」と励ましていただきましたが、当時はその意味がよくわかりませんでした。後に、あれは居るだけでとても貴重な経験だったと気づいたのはごく最近のことで、今ではあの経験は私の社会人生活にお

ける財産であると感じています。

その後は災害復旧費国庫補助金の申請・精算業務に携わったり、2012年韓国釜山でのIWA世界会議や、当時京都大学准教授だった平山修久先生がコーディネーターされた日米地震対策ワークショップなどで東日本大震災における仙台市水道局の経験を共有する発表をしたり、東日本大震災における造成宅地の水道管破損状況の分析などもやらせていただきました。知識も能力もまだまだ未熟でしたが、勢いだけで突っ走り多方面にご迷惑をお掛けしながら、先輩や上司にずいぶん助けいただき多くのことを学ぶことができました。発災時に最前線で対応に当たられた先輩方ではなく、震災を経験していない私が震災のことを語り継いでいくことには葛藤もありましたが、経験していない私だからこそできることもあるはずと信じて取り組んでいました。災害の経験は、将来必然的に経験をしていない世代が語り継いでいくこととなります。当時の私がどのくらい役に立つことができたかは分かりませんが、被災直後に「震災を知らない世代第1号」として取り組ませて頂いたことは、今後私よりも若い世代に繋げていくことを考えると大きな意味があったのではないかと思います。

私も社会に出て今年で10年になります。後輩からは「震災の時は中学生でした」なんて話を聞くことも多くなり、あと10年もしたら「震災の時は生まれていませんでした」と言う後輩も出てくるでしょう。この10年、あつという間に過ぎて行きましたので、震災を知らない世代が中心となり社会を動かしていく時代もあつという間に来るのではと思います。経験を語り継ぎ、風化させないようにすると同時に、次の大きな災害の時に今度は無力な自分ではなく第一線で役に立てるように日々精進していきたいと、10年目に当たり決意を新たにしています。